細風抄

尾上柴舟著

新撰代表短歌叢書

著　　者（昭和十一年秋）

目次

◇装幀　中川一政

細風抄

靜夜

なつかしき思湧く日は市に立ちもの乞ふ子ら
も知る人のごと

遠き樹の上なる雲とわが胸とたまたま逢ひぬ
靜かなる日や

風絶えぬ鳥なき止みぬ天地(あめつち)になど我ひとり慌
しきや

静やかに月は照りたり天地の心とこしへ動かぬがごと

天地にただ一人なるわれをおきて何處さまよふ我心ぞも

小さき芽は土より出でぬひそみたる喜世をばうかがふに似て

燈火も息づくさまにゆらめきて少し熱ある夜のここちかな

木枯に枝やすからぬ鳥の巣と似たるを思ふ熱
を病む日は

月青う霧よりさしぬ春花の時なる人も涙しぬ
らし

何ならぬ物の響も興ひきてゆかしき春の地と
なりしかな

窓の灯の油の壺にちひさなる波見て秋の夜を
更かしつつ

夏立つや濃紅 濃葡萄 濃紫 花の舞踏に野は明けにけり

今か春冷えし小指(および)の尖(さき)にしも暖かさこそみちわたりけれ

水湧きぬ陽炎たちぬ草萌えぬいま大地は静心なし

月かげは小草にさしぬささやかで眠れとさとす母の如くに

永日

夕靄は蒼く木立をつつみたり思へば今日はや
すかりしかな

けだかうも三月の花ぞひらきたる淺緑なる空
を背にして

ゆたかなる土のしめりに去年蒔きし花の種ま
で思ひ出でにけり

今日もまた人を導くわが住まぬ理智の世界を
指し示しつつ

ある日ふと得たるこころちしあたらしく起る思
に驚かぬかな

默しつつ聞けばこそあれ世の中の賢し人らの
論議するこゑ

様かへて來たるべき日の待たるるや今日は昨
日のそのままにして

らんぷの火兎の耳のやうなるに思ひぞいづる
若き日の山

さまざまに思ひこそ見れわれといふ醜きもの
の厭はしさより

思はざる言さへ云ひつ生くといふ一つの事に
かかづらひては

つくすべき事はつくしぬやすらけき夢もやあ
らむ夜は近づきぬ

濡れそよぐ小草の上にあらはにも月はさすなり冬枯の森

今日もまた生命（いのち）の道のくるしきを息（いき）する屍（かばね）さながらにゆく

明日といふ日のたたかひを打ち忘れのびしままなるわが手足かな

起き出でて今日のとよみにまた入らむ今し時計は六時をぞ打つ

人は馳せ車は走る八衢にさびしきことを思ひつつ立つ

二人よりなれるわが身かわが心心とたがふ日こそおほけれ

心をば一日一日と欺きて生きつづきけり今日といふ日

くみしえぬ人のあまたを冷やかに見て過ぎしよりただ一人のみ

ともすれば黄なる胡蝶の来てめぐるあゝわれ
こよひ熱を病むらし
鱗鱗と車のひびき岡を行く月のこよひのうら
がなしさや
熱病めば水の中なる魚のごと身は尺ばかり静
やかに浮く
静かなる宵にはあらずや立ち出でてかの月輪
のきしる音聞け

くやしくもまことを云ひい巧なるつくりがた
りの群にまじりて

青山にて

死はやすきものとしおもふ白白と墓おほく立
つ冬草の上に

花咲きぬ散りぬといふを星の世のことのやう
にも聞きてあるかな

おなじ地におなじ木ならび今日もまたおなじ
葉と葉とあひ觸れて鳴る

いつはりも少し交へて談ふまで馴れはてにけ
り世にも人にも

淋しさや「今ぞむかひの木に落つる月」とのみい
ひ戸をたつる人

脚一つ缺けたる椅子の辛うじて立つやとわれ
のかへりみらるる

雨降れば薔薇の若芽のうす紅の色よりあさき
よろこびぞくる

堪へがたき心の憂秋風にゆらるる花をひとり見るかな

青の空白き雲浮くその下にいま我立てり思ふことなく

水汲めば底のいさごの浮かぶごと星こそ出づれ空の奥より

木草みな祈をささぐ青澄める月の夜露に頭たれつつ

日記の端より

旅の歌

つけ捨てし野火の烟のあかあかと見えゆく頃ぞ山はかなしき

春の谷あかるき雨の中にして鶯なけり山のしづけさ

山の空一むら白うかぎり咲く櫻かなしき夕まぐれかな

汽車にて

またしても憂き旅人となりにけり杉生の上を
富士のうごける

祖母死す　故郷にて二首

死にてゆく人のあるにもかかはらず事なく山
の聳てるかな

冷やけき土をおこせばあなあはれ祖母が墓と
またなりにけり

こまやかに一木一木の末動く風すこしある朝
月の山

もの云はず黒き影ひきかへりきぬ疎林の上を
月まろぶころ

はるばると青草山にのぼり来て夏のあさけの
風に吹かるる

撫子に露みる朝の河原路藁の草履のふみごこ
ちよさ

青白き光のとけてひろごれる月の夜川の潮の
しづけさ

旅といふその一言のあはれさの中の一人とな
りにけるかな

窓の外をりをりに灯(ひ)の光飛ぶ夜汽車となれば
ものぞかなしき

ほの白く底の沙(いさご)の影みゆる悲しき川になく河
鹿かな

旅といふ名にも疲れし夕ぐれの薄あかるみの
中に山見ゆ

山にして立てれば海は廣く見ゆ廣さがままに
淋しかりけり

岸ちかき岩のめぐりに白き泡殘して海の深緑
なる

奈良にて二首

日の入りて空の青きが悲しさに下りむともせ
ぬ若草の山

旅の靴あつき底もてあな無殘わかくさ山の緑
をぞふむ

數みゆる瀨のさゞれより染めてゆく千鳥が淵の濃き淺黄かな

松の音ややにひびけばほのＢうさくらの動く夕暮の山

聲あげて何を歌はむ枯草に小菊すこしが咲きまじる山

淺き水ひかれる中を步みきて月に投げたるわが夜網かな

君と居し渚の石に青海の波ひたひたと寄する
夕暮

夏に入る青草山のふもとより烟のぼれりよき
朝けかな

汽車にて二首

夕暮の空に富士ありわが心著くところなく旅
の道行く

生ぬるき夜の暖房のぬくみよりあたたかう湧
くわが愁かな

をりをりの歌

新しき手袋はめてここちよく冬の巷を行くあしたかな

朝の空みどりに晴れぬ事もなきわが生活をまたもつづけむ

木と木と相憎むに似たり葉の散れば枝と枝とがきしりて鳴るも

時を経ず繭より蝶の出づるごと思はぬ事のある身ともがな

やらむかたなくてのばしし指尖に觸れたる墨汁口取りしかな

雪消えて生乾きせる春の土にすこし吸はるる靴もおもしろ

終點の電車下りてしばらくはこの自由なる身を立たせたり

春の日の玉のやうにも照りとほる若竹原に靴の紐結ふ

聲たてゝまたもわらひぬ笑はずば淋しき思添
ふここちして

君が家の朝の畑のよく見ゆる青菜の岡の霜の
降りはも

卓上のみるくの皮を皺ませてあしたあかるき
春風ぞふく

教室にて

白堊(ちよーく)をばききとひびかせ一つひく文字のあと
より起るさびしさ

歳暮るる町のさびしき流し湯の湯氣の底なる
ありあけの月

これもまた世に住むたづきたづきとて心の外
の事ばかりする

紫もすこしまじれる影ひきてはつ夏の月に立
つ一木かな

さわさわとして日は暮れぬ心にもあらぬ人も
來待ちし人も來

秋の灯(ひ)のほやのくもりに思ひやる霧すこし這
ふ山のみづうみ

夕ぐれの厨こほろぎ皿と皿觸れあふおとにま
じりても啼く

わら屑の一かたまりの上り下(お)り潮入川の日は
暮れにけり

淡雪の草にほどよくかかりたる二月の原に鶯
なくも

時雨ふる廐のそばにひよろり立つ九つばかり
葉をつけたる木

ひそやかに垂るる厨の水道の水のひびきに夜
の涙おつ

をりをりはふとぞ驚くいかにして生きては來
けむ人とたがはず

氣樂なる顏のみあまたうちならび今日の電車
も事なかりけり

春の雪ちらつき來れば停留場(ていりうば)こそな
まめかしけれ

はかなしや續く電車に乘りこぼれ乘りこぼれ
する夕ぐれの人

同じ辻同じよそほひ同じ顔おなじ電車にまた
乘りて行く

滿員の電車のなかにゆくりなく席得し朝の心
の安さ

ほのぼのと部屋の白めばまづ思ふ出でて行く
べき戸の外のこと

たえまなくほほ笑をするほほゑまであるもあ
らぬもただ一つとて

出でゆきて時も力も人に遣る眠ることのみわ
がなりしかな

垢づきて垂るる電車の吊革にすがりゆらめく
この不安かな

妻病みて二首

病みつかれよく寢る妻が枕上夜の蟲こそ啼き
はじめたれ

倒れたる藥の瓶を起すさへさびしき秋になり
にけるかな

母の死二首

辛うじて生きむがために生くる身を安しと母
はかくれたまひぬ

葬列も祭の列も一様にただおもしろう見し日
戀ひしも

白き路

更くる夜の灯にむかひても思ふかなわれとたがへる人の多きを

時わかず心の底にもゆる火を人になげうつ日の來たれかし

言ひ言ひて住むもはづかし心より好まぬ事を好むごとくに

空の色風のひびきに飽きもせずおもへば長く住めるこの世よ

病みて五首

わが熱ぞまたも高まるあつき汐海の底より湧くここちして

わがからだ猶も夢につきてありや眞夜中の氣に浮びてありや

生きてあるこの一事ぞたしかなる高き熱より醒めて思へば

熱すこし高しといへば安からずまことに猶われ
生きむとすなり

まだ若き生の力の感謝より涙流るるあかつき
の床

いくばくも生くといふにはあらじかし心のま
まの一日もがな

ほの黒う塵にまみれて残る雪残らではあらぬ
さだめかなしや

そは何のためぞと問はば默すべき事してあり
きあはれ朝より

春の日にむかひて立てばよろこびが光となり
て降りそそぐかな

木蓮の白きが上にははかにも春の飛行機あら
はれにけり

旅人の名もなつかしうなりにけり春の愁のみ
なぎれる山

心よく雨後の日は照る砂おほき土より水の乾く音して

藤の花散りしが浮きて吹かれゐる暮春の午後の水たまりかな

逆さまに身い落ち入らばいかならむ深く遙けく青澄める空

ふたたびの世といふものを數へてもわが命こそ短かりけれ

生き生きと垣の木の芽がひかるゆゑ初夏の日
を見に出でにけり

涙落つ大天地（おほあめつち）にわれ一人深き夜にさめ物をお
もふに

郊　遊　三首

青麥の穂立烟とみゆる野につづく少女がくれ
なゐの傘

細き幹あまたをのせて初夏の草のしとねぞ野
につづきたる

野がへりの人のむれむれ乗る汽車に物影多き
灯のともりけり

伊香保にて

年暮れてまた老いむ身の見て立ちぬ雪の山べ
の小さなる月

清見寺

たえだえに一すぢの瀧流れたり午後の御寺の
冬の庭山

妻と修善寺に行きて

富士見つつ結草山を歩みゐるわれらはたのし
われらはたのし

宮崎を出でむとして

東京の夜の灯ぞ霧にしめりたるかかるゆふべに旅ゆくべしや

こつこつと靴の音立てふけし夜の星の下ゆくわがひとりゆく

甘しぶき藥を飲むと人にいふ秋のはじめの心の輕さ

秋の冷肌さわらかになりにけりたのしき事を思ひつづけむ

静かなる光の中にうすいろの花を見て立つ夏
の曉

花の色葉ににじみて草も木もそよぎだにせぬ
曉の庭

妻病む

病む妻のすこしおちゐて寢たるまにひとり貧
しき夕食をぞする

玉川にて

水近くすわる鵜の目のさみどりに夏のうれへ
はあつまれりけり

空の色

大空の色も深さもかはらねばまたわが涙おつるなりけり

生きつづきあるより外にすべをなみ今朝も臥床に門をあけにけり

たちとまりふとこそ思へ大地(おほつち)のこのわが足を吸ひも入れよと

天地のなしのまにまになる事の中にわが居てひとり歎かふ

飯坂にて二首

桶すゑてやどの女の米洗ふ川原の石の夕ぐもりかな

眺め入る人の瞳をうるませて山明らかにさす夕日かな

玉川にて五首

目に障るもの一つなき石原に深く息して仰ぐ大空

乾きたる秋のみ空におほはれて野は靜やかに
衰ふるかな

夕日さす川原の小草さらさらと鳴らして秋の
蛇ぞかくるる

青き水ゆふべ黑みを帶びて來ぬ淋しかるべし
魚のはぬるは

細細と鳥のあとこそつづきたれ川原の砂のゆ
ふべ白きに

さくさくと草刈る鎌のひびきより野べは霽晴れ空青く見ゆ

しみじみと冬の寒さの身に入れば心深みをおぼえ來にけり

妻病む

ふとしては病み臥す妻をうち忘れ樂しき宗と思ふなりけり

病みぬれば大天地に一人なる妻ぞと思ふいよいよ思ふ

妻を病院にやりて　二首

夜昼の氷枕にみだれつつ抜けや増すらむ妻が黒髪

春の空うるめる星と眼をあはせひとりわが寝る玻璃窓のもと

大海のくらき緑もにほふまで春の日あたる壁の油絵

ほたほたと枝の尖よりこぼれ落つうるほひ満てる春の夜の雪

伊東にて

ほのぼのと淡花櫻にほふかな御寺の山の春の青きに

うす曇る春日のもとにさきそろふ彼岸櫻のものたよりなさ

うち寄せし波の白泡岩の間に消ゆるおとして日ぞ正午なる

伊東にて妻また病む

いたましく病みゐる人に向ひかねタべの濱にまた出でにけり

春山のあしたの綠あかるくも鶯ぞ啼くあはれうぐひす

色あさき一重櫻のほんのりとうつろふ山の空のむなしさ

手の病癒ゆ

天つ日の下に强くも足ふまむ歪き人にわがかへりたり

これやかの大き力の象徵か强く手を振りわが描く圓

人も見よ夏の日のもと肉體の全くなれる我今し行く

飯能にて

峯の上に峯ありあをく光りつつ大空の日に近づけるかな

夏の衣夏の帽して輕やかに立てり風吹く山のいただき

まつすぐに淀みもあらず飛ぶものか硝子窓あけ放ちしとんぼ

再び手を病む

底いたみすこし癒ゆれば勿體な腕(かひな)さびしく思
ふなりけり

凡人はあさまし日日に身の痛み薄らぎゆけば
神を忘れつ

初夏の日をさまざまに照りかへし輕く林の葉
の躍るかな

豊かにも葉をつけし木の中にゐて何の憂に枯
れし梢ぞ

羽田にて

物馴れぬわれの釣絲あなをかしついついと曳かるるつつと曳かるる

伊東にて

手を伸せばおのづからなる羽根蒲團碧き潮に身はふはふはと浮く

大海の昔の事なき船底の魚のはねあふ音ばかりする

木曾にて

藪原やこがらし吹けば古畑の柔の枯枝鞭のごと鳴る

宇治にて

夕日かげ消えたる堂の片扉淨土つめたくます佛かな

長兄の死　次兄はすでに死せり二首

男なるただ一人なる肉身のわれが來れり兄よさめませ

ただ一人生きつづきつつある事が面目なくなりぬあはれ兄上

嵐山にて

頂は吹雪に曇り嵐山こずゑこずゑの白きあけがた

命さへ人に任して電車にも乗るわれなれどわれを忘れず

病みて

すがやかに初夏の月のかたぶけばすこし病む身を起しても見る

うまごやし白き花ふみ立てる野にあな夕暮の杜宇鳴く

こまごまと綠ひたせる水たまり靜かに庭は夏めきにけり

上總にて

松のかげ明らかに布く砂山に夏よと空を仰ぎ
みるかな

軒近き枝にしばしば啼き出でて高音張りえぬ
その蟬あはれ

盛夏のころ研究室にて　五首

夏深き午後の机に汗おとしわが勤むれば生き
がひおぼゆ

死戰する人の如くに目稜（めかど）立て視力あつめてわ
が繰るかーど

ほと息し立てば夕べのかげ迫る机の上に白し
かーどは

ゆきつまりつまれば道を拓きゆくまだわが力
ゆたかなるかな

指すこししびるるおぼゆさ夜更けてかーど繰
りをへて呼吸(いき)をしつけば

日光にて

山行けば何の憂ぞ悲しみぞ來たりて心しみじ
みとする

よひよひの涙となりて流れ落つわが拙さがな
せる事みな

子なくなりて後

「などか思ふとく忘れよ」とわが心叱り足らず
て妻を叱りつ

かがやかに夕日のさせば失ひし今日の一日(ひとひ)の
悔ぞさやけき

いかに云ひてわれのまことをあらはさむよき
僞を人はよろこぶ

某俳諧家の園遊會にて　三首

初夏の風に波立つ手品すとふくる舞臺のくれなゐの幕

夏の來て絹のやうなる芝ふめば嬉しくもあるか今日の新靴

つばくらの如くさへづり身をかへす手品女に夏ぞすずしき

木更津にて

大空は風曇して灰色に夏の干潟は明けにけるかな

研究室にて 三首

流るるが如くことばの出でくればあなや嬉し
と聲立てぬわれ

一つづき思ひえし事書きはてて仰ぎ臥しをれ
ば夏ぞ淋しき

淋しさを消さむとしては思ふこと「わが書くこ
とは正しかりけり」

散らばりて眞砂の上に落つる日も黄を帶びに
けり秋し近しも

物の影とすれば薄れ薄れしてはかなき秋の日
となりしかな

とぎれとぎれ蟬なき出でて初秋の雲間の朝日
影のすくなき

初秋の風に心やおびゆらむあわただしくも啼
き果つる蟬

鋸山にて四首

安房の國鋸山の石だたみわが來てふめば霧の
かくさふ

岩かげの細路傳ひわが行けば霧と清水と袖に
さむしも

わけのぼる足音(あのと)低しも草も木も霧に伏したる
秋の朝山

かくしつつふまむと思へや風を痛み霧來霧去
る岩かげの路

大日連に二十年　一夕某氏、婿候、帝大の長官たりし人
大兄、其生を語るを聽きて一首

こまやかに語らふ人の言聞けば見はよき名を
殘したるらし

人皆のことほぎあへる中にしてこはまた何に
落つる涙ぞ

明日逢はば先づ語らむの思して兄のうはさに
聞き入る弟

麓には紫い霧かかりたり日の入り方を山に来
たれば

かぐろなる岡を人行く何事か夕月の前をうた
ひ人行く

朝ぐもり

堰塞越す水のつめたくなりぬらし菜洗ふ音のしみじみ聞こゆ

厨より妻の笑の聲ひびきこの夕暮の家内たのしも

曉ちかし牛乳車音はして風庭の木に立ちぬかそけく

眼を病みて二首

青深く澄めるみ空にうちむかひやや痛む眼を
あけにけるかな

おのづから流るる涙とどめかね枕濡らしつ妻
にしらゆな

病みて二首

寝ることの堪へがたければ朝の床めまひする
身を起してもみる

朝に添へゆふべに添へてわが肌に検温器こそ
親しかりけれ

雪の日二首

降りおもる枝の雪よりいささかの黒みを帯びて梅咲ける見ゆ

樋をつたふ雪どけの音たえずして夜は春の夜となりにけるかな

月夜四首

中空に月はかかれり地（つち）にいま短き影をわがひきて立つ

湯を出でてややや滑らけきわが肌に手を觸れながら仰ぐ月かな

木蓮の花白白と浮き出でて垣穂うれしき月の
夜の道

夜の空の青きが前に動くかな明日は散るべき
木蓮の花

大磯にて四首

よる波のあかるき濱に夏近き雲ぞひとむら影
落としたる

をとめらが傘の水色すがやかに海の夏こそ近
づきにけれ

午後凪たちぬ二首

ところどころさせる光にきらめきて雲の下なる海ぞ狂へる

迫り來て立ち上りたる波の腹あをぐろくして濱暮れむとす

大川端にて二首

凪の日の鷗悲しや川の面に落つる埃の中に舞ひつつ

舟ばたにをどるは鯔か河口の葭洲ゆらめき近づきにけり

朝行きて二首

着て出づる輕き夏帽夏背廣夏こそ朝はすがすがしけれ

街路樹のあしたの雫肩うちて涼しく濡れし麻の夏服

山にて

裏山は松山ならしこぶかくもわたる嵐の音ぞきこゆる

研究室にて五首

あたたかき血汐ぞ頬にのぼりくる物書く時はわれし若しも

限ある力をもちて限なきことをぞわが書く神
はたすけよ

われ一人はたらくものか天地は眞日の眞盛物
音もせず

おこり立つ夕とどろきに驚きてぺんを置く時
啼けるかなかかな

謎のごと飛び交ふものか夕立の雲のまへなる
つばくらの群

蜩　三首

ほのぐらき垣のかなたに隣家の水打つおとし
かなかなの啼く

こまやかに夕べの空氣ふるはして靄かかる木
に啼けるかなかな

夕ぐれの庭の繁みにありなしの風目に見えて
かなかなの啼く

初秋の頃

蚊のこゑの乏しくなりしうれしさに深夜なほ
取るわが秋のぺん

蚊帳の中に電燈入れて稚子のごといね惜しみ
する初秋の宵

新しき敷布の上のまろびねもこころよいかな
秋の淺夜は

日馴れては蚊帳の古びも何ならず初秋の夜を
樂しくも寢る

ある夜二首

山思へば山風きこえ川思へば川風きこえ夜は
音なし

み空には絶えず夜の雲行くらむをゆらぎだに
せぬこの心かな

病みて二首

聲たかく語らひわらひ戯れてあれど病の秋は
さびしき

日に高う骨のなりゆくここちしてけうとくも
あるか肌の手ざはり

習志野にて二首

いたましき砲車のあとの草のはな濁れる水に
ひたりてぞ咲く

伸びもえで花もつ草をあはれとて歩みとどめつ秋風の中

春日野にて　三首

露ながらわがふむ草に赤裳ひきいにしへ人も月や仰ぎし

照る月の光となりて降りくらし古人(いにしへ)のうれひかなしみ

夜の氣も月の光もうち沈み動かぬなかにさをしか啼くも

嵯峨にて

木木のかげ深うしづみて音もなき眞青の水に
腹かへす魚

山科にて

道のべの竹葉の霜に朝日さし小鳥よく啼く冬
の山科

汽車にて 二首

生ぬるき中に一筋風ありて冬の夜汽車の寒き
さびしさ

隣りあふ人の撫肩やはらかによりかかり來て
さ夜はふかしも

受けむとし落ちくる刄仰ぎゐる手品師の眼は
燃ゆるが如し

眞蒼なるその顏色よ手品師は死を決してもこ
こに立つらし

滿身の力ひとみに集めつつ手品師は見つ飛び
くる刄

一道の白き環ゑがき手品師の手よりめぐれる
五つの刄

白刃の前に立ちたる戰士かも手品師は今日じろぎもせぬ

刃皆手にしかへれば手品師は片頰に笑みを見せにけるかな

山にて

重重と霧のかさなる谷間よりなつかしきかな人の聲する

旅にて

若葉みなひかり疲れて夏の山靜けき午後を藤の匂へる

四明が岳にて　二首

うぐひすのやめば啼きつぐ杜宇（ほととぎす）若木けぶらふ谷あひにして

大空のふかき緑のちかぢかと迫るをおぼゆ山のいただき

音立てて青きみ空ゆ吹く風に分れあかるき山の小竹原（しのはら）

研究室にて

定めつる事を正しくなし終へし今の心を語る人もが

飯能にて

さわらかに松より透ける秋の日に乾きてならぶ山の岩かな

箱根にて六首

月ささぬ小夜の峡間に霧あらし先立つ人の灯(ひ)ぞうるみたる

月のさす夜山の雲をすかしつつ暗き谷間に立つ林かな

なめらかに水はいはほを越ゆらしも峡(かひ)の夜川は波の音(ね)もせぬ

山のさき一つめぐればあなさやけ月の光にわが逢ひにけり

影しあひ光りあひつつ一山の薄は月に竝みふせりけり

ひそやかに動く一葉のかげもなし滿ち極まれる月のひかりに

仙石にて

澄みまさる夜半の心に堪へ難み月下の山を出でてこそ見れ

東（ひんがし）と思ふ方よりほの白みあけがた近き空のいろかな

伊東にて

山風にさからひ立てる波頭（なみがしら）折らるるままに白く煙らふ

感冒の流行せる頃人をいたみて

まさやかに生きてはあれど消えてゆく人に伴ふこころこそすれ

旅にて人人と別るとて

もろともにかくて行くべき日はいつぞ別はながし命みじかし

某侯爵の別莊にて

若葉みなそよぎをやめて夕近き光の中に靜もれりけり

初夏甲斐の國を過ぎて

青麥の穗尖光らせ風吹けどいまだ散らざる山桐の花

石山にて

日は入りて名しらぬ小木の花しろしこの夕かげに啼く鳥もがな

大口鯛二先生を思ふ

激しては刺すごと强くのたまひしそのみことばのまたも聞こえよ

病癒ゆ

見ゆるものの形正しくなりにけりねぶり足らへる眼ひらけば

伊東にて二首

蒼黒う湧き立つ潮岩窪に流れたまれば澄みきはまれる

松風の中に一筋冴えとほり鷹啼くこゑの嚠喨たりや

ある朝

落葉あまたひかりてあらむ鋪石に新聞おとす音のきこゆる

三保にて

としへの海にむかへば短かる命にまさる悲しさぞなき

大和を行きて 二首

若松の芽こそかがやけうねび山神代ながらの初夏の日に

はるばると麥の穗なびけおほやまといにしへ人を吹きし風吹く

大極殿址

ありたたし大政きこしけむかしこ同じき土をわがふむ

研究室にて一首

今年また夏をこもれば親しまる去年こぼしつるいんくのしみも

快く朝のしじまをみだしつつわが繰る頁(ページ)音たつるかな

深大寺にて三首

湧くところ霧に見えねど幾ところ草間にあらし水の音する

流れいづる方により合ひ亂れ藻の末たわたわと水に靡くも

暮れゆけばいよいよ繁き水の音この水の音夜もすがらかも

目に近く迫るがままに事をして悔いむいとまもなき日頃かな

小庭の月夜九首

月のぼる檜の木のもとの青木の葉白き光をまづぞ受けたる

しろがねの粉なす光ぞまづ來たる檜葉の木立の狹きひまより

さす月の光か小夜を立つ霧か白める中に木木
のうかべる

光もつさ霧ひまなく流れ來て木の間は月にな
りはてしかな

垣下にならぶ小篠の銀の穂のすくすくとして
月に向へる

さしいでし八つ手廣葉に遮られ土にとどかぬ
月光あはれ

八つ手の葉檜（ひ）の葉松の葉青木の葉影異（こと）にして
うち重なれる

木木の影黒く寒けく縮まりて中空に月の今し
なりぬる

音もなく木草は影を投げて伏す凄くなりゆく
月の下びに

大雪の朝牛込見附より土堤内を行きて

絹の上に雲母（きらら）の粉をば吹く如く堤の雪に松の
雪散る

程ヶ谷の岡野公園に貝塚の發掘を見る

掘られゆく小貝の層に今あたる歴史の前の朝
の日光 —

早春の頃二首

しらけつつ咲き極はまれる梅の花散らむとす
なり夕風の中

夕近みゆく舟もなき濁江の水にうつろふ岸の
殘雪

久地にて二首

松のかげ寒くめぐれば梅林日のさす方に座を
移したり

さむざむと細葉ならして並びたつ梅の林の二本の棕櫚

江の島にて二首

風よけて狹きいはほのはごまより海の怒をぬすみわが見る

見るがうちに岩閒の水の盛りあがりすはや汐失ここまでも來つ

餌に走り集ふ鷄（とり）こそかへしたれ畑の隅なる穜物の箱

雨止みてまだ薄ぐらき空の虹青葉の岡に末消えて見ゆ

背戸口の若葉のかげにこぼれたりうすくれなゐの鯛の鱗は

ある曉

生れえし心のままにさめぬれど光はいまだ部屋に滿たざり

鳥羽の樋の山にて

深深と山ひだの間に町つくり住み難き地に人は住むかな

春日野にて　五首

ほのめくは月代かそも春日山なぞへの杉のすゑさやに見ゆ

鹿はみな檻にかへりて音もなき野に見る月の光の赤さ

山ふかき杉の梢を赤き月離れたれどもこの野は暗し

赤黒き光の鈍く流れきてわが立つところ月になりゆく

月かげの及ぶ限りは煙りあひ小夜の大野の草は靜けし

円明が岳にて

空の風光り下りてわれ繞る眞日の盛を山に立てれば

親しもよ天つ光も大空も今わればかり近きものなし

ある朝　二首

竹の垣ひまくぐりえし今ならむ高くうちあげて鷄ぞなくなる

大地に傳はり來り物の音の親しくも身に響く朝あけ

長瀞にて二首

漕ぎ上る舟に逆らふ水はやみ弓と撓める竹の棹かも

白き岩うつろふ淀は灰だみて初秋しるき薄濁かな

沼津にて富士を望みつつ

旅の日は雨としなるか見るがうちににじみ下れるいただきの雲

修善寺にて二首

秋さむみ色冷やけき雲のうへに黒く鋭き富士
の痩肩

のぼり來て見れば人あり秋風のさやぐ音する
赤松の山

岩殿山にて

峯と峯つらなるうへに盛り上り武甲高嶺は日
に近づけり

薄の原にて四首

ほほけたる薄の穗なみかげさして光すくなき
この一路かも

指尖のふとりをおぼゆ薄原二里にあまりてわが來つらむか

風もなき堤の薄たまさかに動くと見れば人の刈り居り

薄原行くにはあかね別れ路問ひしところは遙かになりぬ

少　女二首

ことさらにつくる眞顔もしばしにてわらひくづるるわが少女ども

おどろきの眼(まなこ)みはりてわが少女世になき事を
聞くすがたする

ある朝　二首

おだやかに夜は朝となりわがためによき口と
なりねいざや起きてむ

落つばかり乗りあふれたる朝電車時せまりた
り乗らであらめや

伊豆にて

冬ざれし離れ小島の畑の紋あらはに見ゆる夕
あかりかな

電車内に發病す　二首

病むとしも知りてあるらし弱肩にい倚れる我を人は咎めず

あひよりてやさしき眼して見るならむ人のけはひの近近とする

旅順に行く人に

君越えてゆくといふなる海靑し西に傾く夕空のはて

吉野村にて三首

仰ぎ見る空靑うして梅の花ちらほら咲けり高き梢に

拓(ひら)かれて畑の眞中になれる梅ほしいままにも
花つけにけり

きはやかに晴れたるものか花白き五百木の梅
の上の遠山

岩谷莫哀君の愛子をいたみて

漂ひていづこにか行くいささかは歎も知れる
ちさきたましひ

八木光貫君をいたみて

まさやかに黒き顔見ゆあはれ君君はまことに
死にたまひしか

雲もゐぬ夏の草山高ければ朝の淺黄の空は狹しも

何の木ぞ色濃き草と見ゆばかり群がり續く山のなぞへを

山ひだの緩き流をのぼりつつ光に消ゆる一筋の霧

大谷にて

登るべき夏の岩山前にしてしばらく松の風に吹かるる

大震の日　二首

青ざめし顔ほのみせて疎かりし隣の人も垣越しに問ふ

おそろしく苦しく長き夢さめしこころ静まる天地を見る

潮と共に上る死人を[illegible]に見る　一首

これや人黄いろく黒く群がりて潮のまにまに上り来たるは

焦げただれ濁れる川の淀に浮く群も昨日の都人たち

御光のもとにて

叙位の御召を承りて初めて參内す

絨緞い厚きを履めば御廊下を行く身傾くここちこそすれ

退出しつつ

熱き頬を吹きさましつつ徐ろに御垣高松風おこり來ぬ

濱離宮に參りて

ちよろちよろと春のよろこび流し入るる川あり君が苑の大池

大川の末に濱離宮あり

あないやし君が出でても見なさむを東京灣の泥ざらへ船

風強き日濱離宮にて

咲きたわむ八重花櫻吹きしをり白く風行く御芝生の上を

觀櫻御會の日濱離宮にて

白金のないふほーくの末光る君が御苑の春の暮方

明治天皇崩御を承りてとく參内す

慌しく涙ぞくだる坂下の大き御門をまかんづる時

御大葬を拜み來る

みさき人ささげつづける松の火のゆらぐまに
まに落つる涙か

大正天皇　即位の大御輿に出でますを二重橋近く
拜み來る　二首

御前おふ騎兵の小旗ちらちらと二重橋今明け
わたるなり

御車の六つの御馬の上ぐる足眞砂の上に落ち
て亂れず

太　平　樂

初夏のわかき光のなかに鳴る黄金の鐙音のよ
ろしさ

紫宸殿の大庭にて

列旙(なみはた)の御旙の風に立つる音も朝ゆたかなる大宮どころ

正倉院にて

光滿つうづの御寶え堪へむや臣等千とせの後に拜むに

拜謁

わが前に立たせますとは思へども心空なり臣の子われは

皇太子殿下の御外遊を奉送す

御供人汝が過(あやまち)ぞ過ぞ皇子(みこ)の御上にさはりあらさば

おのづから目に滿つ涙御車の過ぎて後にぞわ
が拭ひつる

觀櫻御會の日新宿御苑にて 三首

春の日に咲きしづもりて青芝に影を落せる花
櫻かな

咲きつづく花にかくれてあらはれて御列進む
青芝の上を

仰ぎみる御面ににほふ赤丹の穗御健やかに皇子(みこ)はまします

御儀の日御物の撮影を監督す　餘震折折來たる

とどろきの高まり來ればおもほえず大御寶に手をかけにけり

皇太子妃殿下の御成婚の日宮中より御歸り給ふを赤坂離宮に迎へ奉る

萬歳のとよみの中を尊しや君が御車地を照らし來る

かく座（ま）せと願ふが上に願ひにしわれらが誠神ぞ受けつる

皇孫殿下御生誕の翌日參内して

さわやけき朝の心に著ていづる絹帽（しるくはつと）も重からなくに

大君のたまへるつかさ名に添へて書き終へに
けり太く正しく

御歌拝寫の御命を蒙る 二首

うちふるふ指を静むと灯のもとに筆の毛尖を
見つめて久し

書き終へて息をほとつく力みな筆一もとに入
りしこころちし

皇后陛下 女子學習院に行啓せられたまへる日

いささかの慄を帯びて部屋に満つわが聲われ
のこころちせぬかな

問はせるはわれかあらぬかとばかりに心おどろく大御ことばに

先帝の靈柩の葉山より歸らせたまふを迎へ奉る

かなしくも大御車の灯のひかり霜重き夜の路照らし來る

今上陛下　宮城に入らせ給ふを拜み奉る

天のごと高くいませど親しくもなつかしまる大御影かも

紀元節の朝

ゆらぐべき日はなからめど御民われら止まず堅めむ大和島根を

大正十三年

閒歩集

朝の心

静かなる朝の心に来たるもの神ならずして何
ならなくに

禮(ゐや)やかに仰ぎみるべく大空に神はこの太陽(ひ)を
置きにけらしな

草も木もわれと等しき喜びにひたるか朝の日
にをどりをり

うららけき朝の光の中になほ小さき怒をおさへかねたる

思はざることばの末にあはれわれ人の憎みを求めてありけり

つつましき心をもちてわが仰ぐ朝のみ空のなみだぐましき

強震二首

ほのぐらき庭に妻呼び木草みなをののく中にわれもをののく

霜白きあしたの庭の敷松葉素足してわが履み
てありけり

新大噴泉池三首

崩え入りてまだ落ちつかぬ畑土のかげ動かし
て湯の湧き上る

湯のけぶりさゆらぐままにうつる日の光も動
く新池の上に

絶間なく泡捲き上り青黒さ極まるところ湯の
湧きつづく

玻璃越しに月さし來らし窓掛のしろさぞ浮ぶ
闇の底より

紅梅五首

朝の容澄めるがまへにまさかりの薄紅梅の枝
ななめなり

頬寄するにいささか高き枝なれや咲かむかぎ
りを咲ける紅梅

薄黄なる蕋にあつまりさせる日にすこしく反
れる紅梅の瓣

風ややにうごくさ庭の夜はめでた梅の匂と沈
丁の香と

春ふかみ風立つ庭に椎の葉と紅梅の花と散り
てうごける

二松荘にて三首

黄にひかる竹の梢をわたる風春にしあれや音
の聞こえぬ

影うつす梅のほいゑをうごかして春の山水湧
きひろごれり

山一つかなたの谷をわたる風いただきの松に
吹きのぼりたる

島椿四首

春さむきかぜに押されて土濱にうねり上れる
底黒き波

島のさきめぐれば谷にひかり滿ち群椿こそ花
つらねたれ

谷の篠黄なるが中に島椿くれなゐの花をここ
た落とせる

見おろせば赤土くれを置くごとし雪の磯邊の
眞裸の海人

八　櫻　十首

うつり來て櫻が枝にかかりつつ雨もつ月の影
の乏しさ

夜の空の青さしのぎて咲きほこる櫻がうへに
照れる明星

雨ちかき空の下びに咲きおもりゆらぎも見せ
ぬ花櫻かな

暮じみる門邊の櫻おくり出でて別れむとする
妻とあふぎつ

咲きたわむ八重花ざくらゆさゆさと搖らぐが
見えて夜の風ふく

正午過ぎて吹くをならひいほこり風櫻にあた
る音のゆゆしさ

おほおもと枝を撓めて吹く風を靡きすごせる
花ざくらかな

大和にて

わが履むはいにしへの土大みかど闕開かむと履みましし土

吉野町にやどる二首

向つ峯をに月を負ひたる宿のかげ黒くうつろひ夜は更けむとす

初夏の月照る山の夜もすがらひびきのぼらふ谷川のおと

春日野の藤三首

木の間漏るひかりに見ればむらさきの藤の垂り花みな雫する

夏に入るあしたの露に咲きおもりゆたかなる
かな藤の花房

朝の日にうすき紫透きとほり散る日ちかしも
藤の花房

新和歌浦

小松山なだるる裾のはるばるとい照りかがよ
ふ海につづける

森秀三君を悼む

くれなゐのにほへるおもわいたづらに古き都
の土にまじるか

草　山二首

幾筋かうねりのぼれる道見せて草山臥せり滿月のもと

草山の肩をながれて滿月のひかりはおよぶ谷のさ霧に

阿蘇山にて二首

照り著き日を背に負ひて上乾きしるき泥山あへぎてのぼる

うつそみの命を輕みちはやぶる神のおきたる火の上に立つ

津和野にて

迎ふべき人を待ちつつ夜半の驛満月の下にわが立てりけり

田儀にて三首

波のむたかよりかくよりまろびあひ悲しき音を立つる石かな

遠く來て岸にとどかず折れかへる波の心もはかなかるべし

長濱の月の下びにひかりつつよこさに走る波がしらかな

大和にて

大帝かくしてや國見したまひし秋日照りわたる大和國原

人こゑをこだまかへしてほのぐろき木むら風なきいかづちの闇

新興の帝都を讃せる中に

いやましに力は起る天つ火はこの人の子を燒き勇ませり

湧泉

伊東の別墅の湯再び湧く二首

底ひより泡群れ上りわれの湯は天つひかげをみだして湧くも

むらがりて湯より立ち立つぬくき霧風のきた
ればわが面打つ

箱根にて二首

山風にみだれくるへる竹むらのなかに白きは
山櫻かも

風來れば雲もなみうつ竹山の竹にまじりてゆ
らめく櫻

伊東へと志して網代の峠を越ゆ　二首

ほのぐらきかげにもあまた花つけて椿の大樹
山を照らせる

草山のなぞへをうねる細き道海におりゆく人
あるらしも

四明ケ岳をのぞむ

初夏のみどり親しき草山をうねりつつのぼる
人人の列

たのしげに人こそ遊べ天つ空手もとどくべき
高山の上に

人らみな樂しく遊べり正午(ひる)過ぎて吹くがくせ
なる風なおこりそ

木曾川にて二首

岩の秀[ほ]にうす靄かけて壁たてる岸の高山月に
そむけり

宵くらき岩間くぐりて行く舟に時にかげさす
山のうへの月

高野山にて

さわかひの眞木立つ山ゆ來る風に汗にぬれた
る襟あはせけり

あふぎみる眞木の繁山こもり山雲なき空の日
に匂ひたり

[illegible]能山

頂のこずゑに霧を吹きかけて高ゆく朝の風の音きこゆ

歳暮の頃

暮近し妻は病みゐて外面にはあらしの音の日もすがらなる

病みて

眼の前を黄なる光ぞとくすぐる闇の小床にわが咳き入れば

この日ごろ霜のちからの添ひぬらし庭の小笹の末白けたり

鹽原行　三首

ひた走る車の中に妻とゐてあひ云ふことの何
ぞ親しき

運轉手車とどめてなにか云ふ暮の谷間の瀧の
おとかな

山の瀧光もなくて落ちくるや風にかわける岩
のひまより

伊東への道にて　三首

正午（ひる）近み春日かげろふ砂畑みじかく桃のかげ
うつりたる

颪かよふ磯山ざくらたわたわと枝うごかして
今盛りなり

海の風來れば散るべくゆらぐかなはかなき山
の一重ざくらは

岩谷莫哀君の病の快方に向へるを喜びて

今日にして云ふはやすしも昨日までほとほと
君を見ぬかと思ひき

奥多摩にて

せかれつる水の怒のなほのこる川瀬の波にな
くかじかかかな

榛名山にて

山の雲ちぎれちぎれず行くままに降りみ降らずみ高原の雨

四萬温泉にて　三首

向岸連なる岩の背ぞしろきこなたはささぬ月のひかりに

ふたたびは來むか來じかのさだめなき山にして見る月のあかるさ

向山こずゑをあらみ照る月のひかりぞおつるくらき川瀬に

秩父獅子舞二首

笛鼓山とよもしてひびき立つ今こそ獅子はみな狂ふなれ

大海の波かくるふと亂れ毛の亂れ騒立つ獅子がしらかも

卒業後二十五年目の同級會席上

やや老いし顔をあつめて語ることはなはだしくも世馴れたるかな

父の死　四首

障子にはきさらぎの日の照り曇り父の息はも絶えなむとする

揖保川の瀬の音さえわたるぬばたまの清き月夜に父をし焼くも

いぶせしと父や思ひし年たけて話すくなくなれる子と居て

ここにその柩はふかく埋みたりああ何處にも父はあらざり

円岡ケ岳にて

はてもなく擴がり垂るる天つ空とどろく胸をしづめつつ見る

奥深く行きて

大寺を後になして来にし道行き極まれや鳥も

聲せぬ

去来の墓にて

散りつきて竹の古葉も動かざるこの土の下に

居るか去来は

大文字を見る三首

いまいまと待ちつつをれば火さし人ならび立

つらむ様し目に見ゆ

思はずも聲うちあげつ夜(よる)の山割りて燃えたつ

大火柱に

忘れゐし星見えそめて山はまた眞黒き山となりにけるかも

竹生島

午後の日に五百重さざ波照りかへしまぶしき島のさきに出でにけり

箱根にて　五首

音するはつづく自動車乳のごと重き谷間の霧の中より

ほのみえし峰の上までわが車霧の底より上り來にけり

草山の草の花みな濡れ靡くさぎりの中を風の
わたれば

霧重き林のおくにひびきつつ朝山くらき風の
音かな

立ち迷ふさ霧の上にあらはれて遙なるかな山
のいただき

湯の湖にて

いささかは水かさ動く泥色の底のなびき藻な
びきあふ見ゆ

舟にて城ヶ島を廻りて

木がらしの吹きしく海にきそひ立ち劔の如き
波頭かな

油壺に上陸す　二首

舟すてて上れば山の草の香もなつかしまるる
夕べなりけり

しづやかに小草をぬらす雨の音もうれしき山
にわれは來にけり

金澤にゆく道にて

眼に近き畔の枯草しらじらと雪ふる里の夜は
明けむとす

金子薫園君の祝賀會の日　三首

言多く君と我いふ中にして笑みておはしし萩
の家の大人（うし）

相逢はずなりし年より今日までに心の友を君
は得にしか

今日の日を淋しと思ふことなしや君と離れて
あるわれのごと

山色連天　二首

さみどりの大野のはての高まりの山となりつ
つ空につづける

紺碧の空の下びに連なりておなじ色なる山ぞ
波うつ

深夜　九首

更けはてて青さ極まる夜の空の底ひにひとつ
月の浮べる

はるばると光おくりて月は今わがよりて立つ
樹の上に來つ

傳へきく月の越水（をちみづ）おちくるや濡れて光らぬ葉
こそ見えざれ

八つ手葉のひろく黒きにまじりつつ土にうつろふ竹の細かさ

澄みまさる月の下びに夜半を立ち冷えゆく心堪へられなくに

何處にか鷄はうたへど冴えまさり眞夜のみ空の月は動かず

月は屋の西になりたらむ窓掛にあたるひかりの斜に白き

ひえびえとたまる雫をもてあまし月にしづもる八つ手の葉かも

動くべきものはあらざる月の下にそよろと音のするは竹かも

鳥羽の通の山にて　二首

いただきは松の嵐の音たかし心いささかおびえてのぼろ

湧き上り泡だちかへり海は今風の怒につれて怒れる

内宮

神苑の並木の櫻晴るる日の風に搖れつつ花咲かむとす

岡崎にて東山を望みつつ二首

山出づる月の光はとめて見る車の窓に今とどくなり

夕山のくらきを出づる大き月あらはれたるは半ならざり

相模を行きつつ二首

伸び立てる草生の中に向けつつ飛ばむとすな

蒲公英の實は

川はまだ蛇籠つくるに寒からし水いでし人の
足あかみたり

宮の下にて二首

薪よりちひさき木木の列をなす山の高處に人
動くらし

幸うじてわが日のとどくいただきに木を植う
る人は二人なるかも

篠島にて二首

晴るる日の海にうかびてうづたかく緑を盛れ
る初夏の島

照りみてる光を切りてわが舟は眞晝の海を強
く走らふ

馬關にて

仰ぎみる舟の檣夏ふかき空をななめにさして
太しも

舟い吐く捨水の音波の音にまじるは錨捲く音
らしも

洛東江にて

果樹園の上をまろびて大き月大江の水にうつ
りたるかな

永渭江にて

渡りをへて草にぬぐへる足うらのほてりを思
ふ夏の淺川

景福宮にて

掃ふべき人しなければ伸びい切れる夏草の末は
皆白けたり

秘苑にて

蒼白き石のきざはし松の葉の亂れ降り來たり
晝ぞ涼しき

長安寺ホテルにて

闇ふかき山の窓べの灯ににほふ踊る女の桃色
の肌

舊萬物相

とがり立つ岩の穂尖に霧しろきあしたの空は縦に裂けたり

飛鳳瀑

横に吹く山の嵐に散りもせで傾き落つる瀧は長しも

衆香瀑にて

つくづくと見のながければ山の瀧ときどき強く水落ち來たる

海金剛にて

蒼波に翼を染めていづこまでゆくらむ鶴ぞ大海の上を

叢石亭にて

日に背きをぐらき岩のはざまより明るき方に波湧きめぐる

平壌牡丹臺にて

残りなく洲見え島見え橋見ゆる午後の大江の水照（みでり）の強さ

樂浪の古墳にて

古墳（ふるつか）の闇をわがふみ幾千年つもれる水に濡れにけるかも

[illegible]男徳山にて

かへり来よ火に煽られて灰のごとぺとんの前に散りし魂

二百三高地にて

崩れ落ち渦まき上り湧きかへり亂れ立ちけむ
その人らはも

關門海峽にて

友船を呼ばふともしか大海のこの眞夜中の闇
の深きに

山中湖にて

落葉樹（おちばじゅ）の白き梢をむらがらす林のうへに晴る
る富士かな

川口湖にて

雲かかる山の麓にせまりつつ波あげわたる秋
風の湖（うみ）

折にふれて

若うして今にあひえず悔しくもいささか早く
わが生れたり

田家　朝四首

おきあまる菜畑の露に日のにほひ村ゆたかな
る朝あけにけり

背戸山の雑木のはやし日の透けばあしたた籾ほ
す庭しぬくしも

里中の杜の朝の霧ふかみ光はあらぬ日こそう
かべれ

ここちよき朝の土の露じめりわがうつ畑は瘠畑ならず

伊東にて

天城山高処（たかど）白しもうべしこそ夜をたまる湯の底冷えにけれ

亡父の三年忌に二首

長き髯ゆたけきゑまひ父はまだ死なざるものをここに墓あり

病褥 茶毘 葬 法會かくしつつ三年の今日になりにけるかな

伊東にて三首

塵揚げて吹くは西風散りすぎて優きたなき山の峡より

ぬくみもつ朝のあらしに揺られ揺られ庭木の槇芽をほぐしたり

吹き靡け吹き煽られて風さきにあかるくうめく山の木木ども

牡丹六首

春の日に咲きしづもりて百輪の眞紅の牡丹影ももたごり

亂れざる炎の如く日のもとに眞紅の牡丹盛り
上りつつ

枝わけて春の永日を咲き競ひ牡丹の花は靜ま
らなくに

正午近み眞紅の瓣をみなひらき牡丹の花は隈
も見せずも

葉をかへし風は吹けども重重と咲ける牡丹の
花は動かず

吸ふかぎり春日を吸ひてはく息に人の面うつ
牡丹の花は

ある朝二首

獸よりなほ凄まじき心もて滿員電車今朝も乘
りつる

人いきれつよき電車にくぐり乘り吊革一つ今
得たりけり

小竹の子二首

山の子がかひなにつるす荒目籠あららに揺れ
て來けむ小竹の子

夏の來て涼しくかかる朝霧にぬれて伸びけむ
山の小竹の子

伊東にて五首

山出でてまだ赤黑き月かげにあらずと思ひし
小田の霧見ゆ

一つ呼べは一つ應へてつひにみな月の夜蛙啼
き立ちにけり

田より田へ水とともにも畝越えて蛙妻問ふこ
の月の夜を

しみじみと夜更の月の影さしぬ明日は刈らな
といふ庭草に

月清み寝られざるらし隣人湯屋に出でゆく下
駄の音きこゆ

阿蘇山にて二首

泥山は砂山となりわがのぼる火の中岳はいた
だき近し

おのづから起る嵐にうちゆらぎ狂ひめぐらふ
火の柱はも

鹿児島にて

櫻島するどき肩にいてる陽の強くはあれど空は秋なり

千早城址を望みて

宵の星ひかりを垂れてすぐれ人こもりし山は黒く嚴かしも

金剛山

さわやかに石切る音のひびきつつ秋に入りたる山靜かなり

病みて五首

戸の隙は白みそめたり生きてよく死にてもよけむ日の明けぬとか

蒸しあつき衾の中に寝がへりもせずてしづか
に思ふことは死

生きゐむもおもしろからむかくながらいのち
消えなば更に樂しき

隣間のひそひそ話いちじるく氣にかゝるをみれ
ば心実れり

戸の外は雨 風 霙生きてゐむ價もあらぬ日の
續くかな

吉野にて

咲き群るる花をわかちて明らかに陽のさし透る山櫻かな

鳥羽にて

松のかげ保ちながらも白き岩海の月夜に静もれりけり

京都にて二首

東山わかき綠に立ちまじり椎の花かも黄をむらがらす

東山つづくみねみねほのぐろき上に夜中の月一つあり

加茂の社にて

神山の杉の上ゆく雲ありて祭はいまだ初まらぬかも

素月集

谷川温泉にて

雑木山吹きわけて來る風さきに湯を出でし身を立たせたるかな

祝賀會席上

このあつき人の情のあらはれにあたるべからずわがしつる事

成田にて

背ながら床にわが入る心やすさ旅にしあればする事をなみ

小湊にて舟にて灣内の鯛を見る

次次に舟離れゆく鯛の色久しうてなほ波にまぎれず

小松原鏡忍寺にて

大寺の暮るる軒端の高きより一筋くだる太き雨垂

伊東にて十三夜月よきに逢ふ　三首

うつすらと月を眺めつつ春もはや半めきたる雲の動きや

月うけて矢筈の峰の際立つや更けて夜を湧く雲のまなかに

堰塞越えてにはかに白き瀬の水に雲を出でたる月ただにさす

梅園にて

溪に行く畦の細路うす甘き梅のにほひの傳はり來たる

米壽會、人人わがために歌碑の除幕式を行はるる席上

よき代に生きてわが居てたぐひなき人の情に逢ひけるものか

小湧谷にて

花も葉もうすくれなゐに煙らせて朝日今さす谷のさくらに

藍ふかき廓の靜けさ咲き滿てるさくらが上の
日に背く山

那須野

吹きわくる風につつじの花狂ひ光ちらつく夕
野の道は

靑くらくわたる嵐に夕野路こごた躑躅は花を
こぼすも

うち亂れ夕くれなゐも紫も風(かぜ)尖(さき)にして躑躅は
散るも

雫石川のほとりにて

花白き馬酔木二本春さむき大野の雨に濡れながらなる

中津川のほとりにて

行けどなほ行きつくされぬ大橋の中に仰ぐ淺春の月

法師温泉に向ふ一自動車道上

風ありやまだ色淺き桑畑の中の水田の波光る見ゆ

鉛の湯にて

渓に添ふ竹にまじりて山櫻木の反射の陽にかがよへる

河治温泉にて　二首

滑らかに岸の岩床湧き越えて光をこぼす湯ぞ
ゆたかなる

天つ陽の底まで照らふ湯に浸りじつとしてゐ
る子の膚のよさ

透きとほる白さの底の薄茜指の爪もこのごろ
めでたき

汗ばめる午後の額のむづがゆきまた新しき情
を感ず

大き蛾を拂ひ出して皿の上のメロンの角度鋭
きを見つ

身に保つ力のかぎりひきしめて怒を人に移さ
じとする

人よりも持てりと思ふあきらめも何ぞ我今憤
ろしき

くすぶりて燃えもあがらぬ火の如き底の怒の
止む日知らなく

わが顔も昨日のそれにあらざらむ物のすがた
の日に日に險し

物の栖居に變きを見出れば心しきりにとが
るを覺ゆ

廣島にて

ほのぐろく濕れる道に光さし曉の街は人いま
だ行かず

元安川の岸に宿る

滿つ汐にさせる夕日の反射家並白くてんとを
かぶせる

夜を深み滿ち滿つ汐に浮び來て滿月はあり高樓の下に

住吉祭

漕ぎめぐり「ありやせこりやせ」と櫂操る子月の下代に十四人なる

大王崎燈臺に上る

あへぎごこちめまひごこちに堪へかねて目の下の海をしばらくは見ず

[illegible]にて

とんぼうは荒瀬の上を群れ飛べり馴れ極まれるものの安さか

法師庵の縁にて空を仰ぐ晝に

哀れにも晴れたるかなや飛ぶものは飛びつく
したる夕暮の空

岩谷莫哀君の七年忌に

病みこやり瘠せは瘠すとも今日いまだ生きつ
づきゐる君にありせば

深深と澄みたる空に一つ浮き有明の月のたよ
りなげなる

伊豆の西海岸にて　二首

島山のあしたをぐらき潮の中に光を運ぶさざ
なみの群

まじろかずみつめてあれば島ゝ木もただここ
もとに寄るここちする

皇太子殿下御降誕の朝參內して　四首

かくのごと參う上らむと思ひつる心のままの
朝明けにけり

阪下の御門廣けど入り集ふ車にわぶる衞士も
うれしげ

東の御車寄にさせる日もすでに春なる大宮ど
ころ

「聖上」の御札の前にぬかづきて書き上ぐる文字
の拙なき畏さ

元日

まづ一日暮れて星みる大空のいづこにかいま
だ紙鳶のうなりす

伊東にて

岩越えてあした寒けき水の音清きねざめに妻
とし聞くも

長岡にむかふ

なだれ来む雪の危さ思ふらむ語(こと)なきかな車中
の人は

悠久山にて四首

やはらかうわがふむ足にこたへつつ春近き山
の雪は散らざり

雪の上につづくあしあと履みあやまち松の上枝
枝をわが握りたり

笑ひつつ雪より立てるすきー人ころぶそれだ
に樂しかるらし

雪の斜面下るがままにすきー人腰くねらせり
これはころばじ

御賀に參内して 三首

たぶたぶと賜はる御酒をみな受けぬ大御盃大きなるまま

醉ひ足りて豊明殿の大床をゑまひごこちにふむが畏さ

醉出でて燃えむばかりに照れる頬も今日にしあれば人許すべし

水戸偕樂園にて

花持つか梢いささか白ませて梅は芝生の黄なるに立てる

京都なる樂友會館にて講演の後

思ふこと云ひ盡したる心やすさ山を離るる月に向ふも

宇野より舟にて高松に渡る

午後深く内海霞む日ぐせなれや蒼茫として遠し屋島は

金比羅にて

夕山のくらきが前に日のあたる櫻一木の花さやかなる

鳴門にて　五首

淡路より雨をはこびて荒潮に力加ふる風[illegible][illegible]ばす

落潮のかぎりにあれや湧きあがり狂ひ騒立つ波ましろなり

青波をますぐに切りて来つる船あはや傾き瀬に乗り入りつ

流されじ巻かれじものと荒潮と舟は争ふ傾きながら

幾荒潮越えて傾立て直す舟に詰めたる呼吸吐きにけり

伊東にて

妻とわがことばと絶えし眞晝間の障子の外の遣水の音

寂光院にて

住みつかで幾夜夢見ずおはしけむこの山水の音の荒きに

建禮門院に奉仕せし阿波內侍の像は院の御自作と傳ふ

古りながら生き生きと見ゆるまめやかさよき人もちて君おはしけり

葵祭

初夏の埃の中を祭の列みどりくれなゐゆるがして行く

奈良にて

春日野の藤の紫白けたり悽しく三日を遲れて
わが來し

吉野にてさくら花壇にやどる　家は渓谷に臨めり
その夕べ

滿ち湧く谷の段畑立つ桐の梢ばかりが悲しく
黒き

その朝

日の下の森より立ちてほつほつと鴉は谷の空
へ上るも

日和山にて

ここにしてわが見るところいくばくぞ波はつ
らなりつらなり煙る

佛法僧を聞くべく夜鳳來寺山にのぼる　三首

昔見つる彼の大岩の空かそも今し鳥啼く淸き
月夜を

聲止みて月ばかりなる夜となれば人等はじめ
て物言ひにけり

床に着けばまた啼く

山の鳥またも啼くよと呼ぶ聲に輕くはねたる
麻蚊帳の端

生駒山頂にて　二首

大阪の灯影は見えずなりにけり河內國原夜霧
立つらし

迫り寄る霧につぎつぎうるみゆく夜の高山のともしび

霧島にて

夕かけてふむ廻廊のあたたかみ苔の埃のたまりしるしも

[illegible]峠にて二首

濃き影をおちてなみ伏す群山の上をわたりて陽は傾くも

傾きていよよあかるき陽に青き藍色ふかき山の半壁

雫消澤のほとりにて

花白き馬醉木二本春さむき大野の雨に濡れながらなる

木津のほとりにて

行けどなほ行きつくされぬ大橋の半に仰ぐ淺春の月

法師温泉に向ふ自動車上にて

風ありやまだ色淺き桑畑の中の水田の波光る見ゆ

儀の湯にて

溪に添ふ竹にまじりて山櫻木の反射の陽にかがよへる

河治温泉にて　二首

滑らかに岸の岩床湧き越えて光をこぼす湯ぞ
ゆたかなる

天つ陽の底まで照らふ湯に浸りじつとしてゐ
る子の膚のよさ

透きとほる白さの底の薄茜指(および)の爪もこのごろ
めでたき

汗ばめる午後の額(ひたひ)のむづがゆさまた新しき悩
を感ず

大き蛾を拂ひ出して皿の上のメロンの角度鋭
さを見つ

身に保つ力のかぎりひきしめて怒を人に移さ
じとする

人よりも持てりと思ふあきらめも何ぞ我今憤
ろしき

くすぶりて燃えもあがらぬ火の如き底の怒の
止む日知らなく

わが顔も昨日のそれにあらざらむ物のすがた
の日に日に險し

物の稍日に鋭きを見居ればか心しきりにとが
るを覺ゆ

豊島にて

ほのぐろく濕れる道に光さし曉の街は人いま
だ行かず

左衛門の岸に宿る

滿つ汐にさせる夕日の反射家並白くてんとを
おろせる

夜を深み滿ち滿つ汐に浮び來て滿月はあり高き
樓の下に

住吉祭

漕ぎめぐり「ありやせこりやせ」と櫂操る子月の並
びに十四人なる

大王埼燈臺に上る

ふへぎごこちめまひごこちに興へふれて目の
下の海をしばらくは見ず

熊野にて

とんぼうは荒瀨の上を群れ飛べり剛れ倒され
るものの姿さぶ

法師庵の縁にて空を仰ぐ畫に

哀れにも晴れたるかなや飛ぶものは飛びつくしたる夕暮の空

岩谷莫哀君の七年忌に

病みこやり瘠せは瘠すとも今日いまだ生きつづきゐる君にありせば

伊豆の西海岸にて　二首

深深と澄みたる空に一つ浮き有明の月のたよりなげなる

島山のあしたをぐらき洞の中に光を運ぶさゞなみの群

まじろかずみつめてあれば島ら木もただここもとに寄るここちする

皇太子殿下御降誕の朝參內して　四首

かくのごと參う上らむと思ひつるこころいまの朝明けにけり

阪下の御門廣けど入り集ふ車にわぶる衞士もうれしげ

東の御車寄にさせる日もすでに春なる大宮どころ

「聖上」の御札の前にぬかづきて書き上ぐる文字
の拙なき畏さ

元　日

まづ一日暮れて星みる大寒のいづこにかいま
だ紙鳶のうなりす

伊東にて

岩越えてあした寒けき水の音清きねざめに妻
とし聞くも

長岡にむかふ

なだれ來む雪の危さ思ふらむ語（ことば）なきかな車中
の人は

悠久山にて　四首

やはらかうわがふむ足にこたへつつ春近き山
の雪は散らざり

雪の上につづくあしあと履みあやまち松の上
枝をわが揺りたり

笑ひつつ雪より立てるすきー人ころぶそれだ
に樂しかるらし

雪の斜面下るがままにすきー人腰くねらせり
これはころばじ

御賀に參內して　三首

たぷたぷと賜はる御酒をみな受けぬ大御盃大きなるまま

醉ひ足りて豐明殿の大床をあまひごこちにふむが畏さ

醉出でて燃えむばかりに照れる頰も今日にしあれば人許すべし

水戸偕樂園にて

花持つか梢いささか白ませて梅は芝生の黃なるに立てる

京都なる樂友會館にて講演の後

思ふこと云ひ盡したる心やすさ山を離るる月に向ふも

宇野より舟にて高松に渡る

午後深く内海霞む日ぐせなれや蒼茫として遠し屋島は

金比羅にて

夕山のくらきが前に日のあたる櫻一木の花さやかなる

鳴門にて　五首

淡路より雨をはこびて荒潮に力加ふる風[illegible][illegible]ばず

落潮いかぎりにあれや湧きあがり狂ひ騒立つ
波ましろなり

青波をますぐに切りて来つる船ははや傾き潮
に乗り入りつ

流されじ巻かれじきいと荒潮と舟に争ふ傾き
ながら

幾荒潮越えて傾きて直す舟に詰めたる呼吸吐
きにけり

伊東にて

妻とわがことばと絶えし眞晝間の障子の外の遣水の音

寂光院にて

住みつかで遍歷夢見ずおはしけむこの山水の音の騷きに

建禮門院に仕へし阿波内侍の像に隣、御自作と傳ふ

古りながら生生と見ゆるまめやかさよき人もちて君おはしけり

葵祭

初夏の埃の中を祭の列みどりくれなゐゆるがして行く

奈良にて

春日野の藤の紫白けたり惜しく三日を遅れてわが來し

吉野にてさくら花壇にやどる　家は溪谷に臨めり
その夕べ

霧の湧く谷の段畑立つ桐の梢ばかりが悲しく黒き

その朝

日の下の森より立ちてほつほつと鵯は谷の空へ上るも

日和山にて

ここにしてわが見るところいくばくぞ波はつらなりつらなり煙る

佛法僧を聞くべく夜鳳來寺山にのぼる　三首

昔見つる夜の大岩の空かそも今し鳥啼く清き月夜を

聲止みて月ばかりなる夜となれば人等はじめて物言ひにけり

枕に着けばまた啼く

山の鳥またも啼くよと呼ぶ聲に輕くはねたる麻蚊帳の裾

生駒山頂にて　二首

大阪の灯影は見えずなりにけり河内國原夜霧立つらし

迫り寄る霧につぎつぎうるみゆく夜の高山の
上のともしび

霧島にて

夕かけてふむ廻廊のあたたかみ黄の埃のたま
りしるしも

碓氷峠にて二首

濃き影をおちてなみ伏す群山の上をわたりて
陽は傾くも

傾きていよよあかるき陽に背き藍色ふかき山
の半壁

瀬戸の町にて

群れなびく工場の煙よどみあひて夜とく來たる川添の路

御殿場にて

つぶら實を日に照らさせて大富士の前に枝張る一本の柿

岩谷莫哀君の歌碑除幕式の日

にが笑してあるらむか君が歌彫られてありと君が知りなば

元朝拜賀式に勅語を奉讀す

をろがみてみ讀みまつればおのづから朗朗と聲の出でくる嬉しさ

伊東より今井の濱に車を馳す

溫泉に急ぐ車の中に妻と居て物こそいはね樂しきものを

與謝野寛君の柩の前にて

聞くべきを遂に聞きえず別れねばならぬ人とし君なりにけり

沼津のあたりにて　二首

降る雨に色しづまりて桃林富士見ぬ朝を咲き足らひたる

雨霧に末はまじりて桃林薄くれなゐの谷におよべる

津山なる鶴山城址にて　二首

細き枝に花をあつめて立ち群るる櫻が上の夕あかね雲

松たかき大城の櫻今日もまた風なきままに咲き保ちつつ

会津なる白虎隊の墓にて

これまでと一途におもひ切りつらむ若きが故に人は尊き

木津の観月橋上にて

迫り来る山のちからにさからひて雪消川水聲上げくだる

[illegible]常寺にて郭公を聞く、二首

鳴き出づる彼れや郭公からごゑの老聲にして力をもてる

若杉の林にこもるくくみ聲かつこうかつこう郭公なくも

風立てば若葉の梢ゆれ嗔み鳴き移りゆく郭公のこゑ

初瀬にて

眞上より眞陽さす坪の砂に散りて牡丹の瓣は白く反りたり

吉野にて

山の端の空は眞靑に澄み切りて月に近づくもの一つなし

人の死に

ふりかへり見だにもせねばここにわがおとす淚を君知らざらむ

名古屋にて

夢さめて汗しとどなる胸の上にのしかかり來る夜中の暑さ

生駒山の半腹に宿りて　四首

この峯の今朝は見えぬを語るらむ雲の谷間の電車の子らは

雲の散る谷間谷間に見え来るや田畑家寺人道電車

雨けぶる山のしづけさ雷のとどろくなかに鶯啼くも

奈良は今夕日さすらし若草の山を根にして大き虹たつ

長良川に涼を諸友と行く　月対岸の金華山の上にあり　二首

影及ぶ川添道を語り行きをりをりにして月を仰ぎつ

かげくらき山の上へにして月今し澄まむ限を澄まむとすなり

鵜飼

うち競ひたぎつ早瀬に鵜の入れば散る火散る波川うち亂す

北見の國美幌より車を驅りて美幌峠に上る　屈斜路湖はこの直下にあり　三首

霧の中に霧吹き立つる風ありて露もつ草のふるへは寒し

山の霧凝りてつくれる朝露の草生の冷(ひえ)は靴に透るも

さ霧吹く風を強みか湖の面片面よりして明るみ來る

美幌峠より屈斜路湖を左にし原始林を右にして車を馳す　三首

亂るるは湖の朝霧あさ風の大虎杖の葉を鳴らすまま

枝と枝伸びむと競ひ原始より木と木戰ふ林のくらさ

音つよく走る車の窓摩るは丈にあまれる荒草のすゑ

硫黃山にて二首

いがらぽく咽喉をさし來るこや硫氣かかる山にも人働ける

血を吐きて猶働くとあな無殘煙の中に硫黃採る子ら

弟子屈より阿寒に到る原始林中の横斷道路を行きつつ三首

さるをがせかかる枝のみ白うして闇さはてなき林を行くも

木木のみな生きむ死なじの爭ひに原始よりかも陽のなき林

死なじとし枝をからませ葉をまじへ風と光と

木木は忘れつ

阿寒湖にて

布けるごとつづく毬藻の上にさす湖の底ひの

ほの明りかも

登別にて

ふみ込まむ危さにして我行くや泥湯湧き上り

煮え立つ岸を

尾上柴舟年譜

明治九年

八月二十日、岡山縣津山町(今は市)田町で生れた。父は直衛、母は[illegible]。父は舊津山藩士であつた。自分が生れて間もなく歿した。兄は二人、姉は一人あつた。昭和十一年の今は、皆病歿してゐない。

明治十四年

四月、津山町鶴山小學校に入學した。

明治二十三年

三月、鶴山小學校の高等科を卒業した。これより以前に、上原椿邱翁の漢學塾に通つた。が、漢學や詩の面白味は解せられず、頻りに作歌慾が湧いて、遂に直頼高翁のところへ歌を稽古すべく通ふこととした。五月、はじめて上京、東京英語學校(後の日本中學校)に入學した。

明治二十五年

四月、轉校して東京府尋常中學校(今の東京府立第一中學校)に入つた。尾上氏に養はれ

た。病臥中にまた萬葉を初めて、直翁から、古今集を謄寫しつつ習つて暗誦した。上京して大口鯛二先生の門に入つた。「自由に詠め」と云はれたので、大悦びで、日記的に多數作り出した。このごろ、同級に金子薫園君があつたが、遂に知らなかつた。

明治二十七年

この頃、佐佐木信綱、落合直文各先生の歌風の新しいのに興味が湧いて、御歌所風から漸次離れた。

明治二十八年

三月、中學校を卒業した。第一高等學校の試驗を受けて入學した。初めて、落合直文先生に知られて、その門に出入した。金子薫園君と知り、尾上八郎君とも親しくした。與謝野寛君にも初めて逢つた。小中村（後池邊）義象先生にも知られた。沼波瓊音君とも親交をした。

明治三十一年

六月、第一高等學校を卒業して、帝國大學文科大學國文科に入學した。

五月、久保猪之吉、佐佐木信綱、服部躬治、尾上八郎等の諸君が、「いかづち會」を創立した。服部君の勸めで入會した。

明治三十三年

二月、歌御會初に豫選になつた。

明治三十四年

六月、文科大學を卒業して、大學院に入學した。在學中から譯し初めてゐた「ハイネ」の詩を集めて「ハイネの詩」を出した。

十月、哲學館、(後の東洋大學)の講師となつた。

明治三十五年

六月、女子高等師範學校の講師となつた。

十一月、譯集「銀鈴」を出版した。早稻田大學の講師(後教授)となつた。

明治三十六年

十二月、落合直文先生の病歿に逢つて大いに悲しんだ。

明治三十八年

四月、女子高等師範學校教授となつた。高等官七等從七位。順次に進んで勅任待遇、從四位となり、今は正四位勳三等となつてゐる。

五月、徴兵檢査を受けて丙種合格。これより前に、若山牧水、正富汪洋、前田夕暮、有本芳水、三木露風諸君と、車前草社をつくつた。前から關係してゐた雜誌「新聲」にこの作を發表した。自作の詩と、譯詩とを合せて

「金帆」を出した。詩はこれで止めて、短歌に專にすることにした。

明治四十年

五月、歌集「靜夜」を出した。

明治四十一年

四月、學習院教授に轉任した。講師として猶東京女子高等師範學校に出講した。

十一月、實母を失つて落膽した。

明治四十二年

八月、歌集「永日」を出した。このごろ學位論文を書くために勉強した。盜難にあつて、集めた材料が皆無くなつたので「文庫」の選も止めて、それの集めに再びかかつた。

明治四十三年

十月、「創作」に「短歌滅亡論」を書いた。短歌の用語がおひ／＼口語になつて行くと、從來の形式の短歌は、當然滅亡するといふの主眼目であつた。

明治四十四年

金澤重巖、尾張穗草、北河原公海、邊見雨山、石井直三郎、岩谷莫哀、奥川夢郎等の諸君、いはゆる第二車前草社の人人が、雜誌「車前草」を發行したので主宰した。

大正二年

一月、歌集「日記の端より」を出した。

大正三年

四月、「車前草」が廢刊して雜誌がなかつたところが、石井直三郎、和氣朝庭、岩谷莫哀等の諸君が「水甕」を發行するので、主宰する事となつた。爾來今日に續いてゐる。

十月、歌集「白き路」を出した。

十一月、「日本文學新史」を出した。從來の文學史の書方に向かないので、それを改める積りで、「新」と名づけた。

大正四年

四月、「短歌新論」を出した。修飾的方面から統計的に説いたので、「新」を附した。

十一月、歌集「遠樹」を出した。

大正五年

五月、「短歌髓腦」を出した。

十二月、珍らしく男子出生、然し翌日死去した。

大正七年

三月、再び東京女子高等師範學校教授となつた。これから、初夏には、京阪に屡旅行した。

大正八年

十月、歌集「空の色」を出した。

大正九年

十月、大口鯛二先生死去。書の方面の研究に前年から手を出してゐたので、先生を失つたので、大いに失望した。

大正十一年

四月、再び女子學習院に出ることとなつた。「古今と新古今」を出した。

大正十二年

五月、論文が通過して學位を授けられた。さきに提出した論文は、その以前に出した先輩諸氏のと同様、結果が分らないので、新學位令の發布を待つて却下を請求して、新たに別の題目を取つて、提出したのが通過したのであつた。

九月、大震災に逢つて、原稿と書籍とを多く燒失して失望した。

大正十三年

八月、九州山陰地方へ旅行した。これから夏休には、毎年旅行することにした。

大正十四年

三月、「歌と草假名」を出した。
五月、歌集「朝ぐもり」を出した。
六月、「日本文學大系」の解題を書きはじめて翌翌年にいたつて、二十四册で完結した。
七月、「平安朝時代の草假名の研究」を出した。

昭和二年

二月、養父を失つた。あまり早い別で悲しんだ。

昭和三年

八月、妻とともに朝鮮、滿洲を旅行した。細井魚袋君同伴。ハルビンまで行つて朝鮮を通つて歸つた。

昭和四年

十二月、歌集「御光のもとにて」を出した。

昭和五年

七月、「行きつつ歌ひつつ」を出した。
十一月、歌集「閒歩集」を出した。二日 祝賀會が開かれ、約四百名の會衆があつたので、感激した。

昭和六年

四月、靜岡縣伊東町物見松下に歌碑が柴舟會の人人の發起で立てられた。歌は「つけすて

し野火の烟のあかあかと見えゆく頃ぞ山に悲しき」であつた。

昭和七年

四月、俄に養母を失つて驚いた。

昭和九年

四月、奈良縣生駒山中腹に大淵善吉氏の手で歌碑が立てられた。歌は「うちおかふ心ひろしも朝雲の流るる末も遠き國原」であつた。

昭和十年

四月、明石市人丸神社境内の人麿歌碑に執筆した。これより先きすでに茨城縣玉造町高須松の碑、上野[illegible]歌碑にも執筆した。

昭和十一年

四月、歌集「素月集」を出した。水甕社の人人の手で名古屋市美術倶樂部で、還暦賀會が開かれたので恐縮した。

巻末小記

自分で選集を作つたことは濤樹以後三度であつた。今またこれを四度するのは、無駄な事であると私も思ふのであるから、他の人人も同様に考へられるであらう。

しかし従来のは、いづれもその選集著作の當時までの作である。その以後のもののないのは云ふまでもない。ところが、私は最後の選集著作以後、拙劣ながら、創作を止めないのである。二度目以後また一つ集を出してゐる。しかもその各に少なからぬ歌數を持つてゐる。それのみでなく、進歩か退歩か本當は分らないが、私自分では進歩と考へてゐる創作的態度がその中に含まれてゐる。従つて、この態度を本として見ると、従来の歌には改むべきものが多く、また削るべきものが少なくない。或は一集全部を捨ててしまひたいやうなものさへある。更に厳選したものをまた精選したい、またそれに加へるに多少の改訂を以てしたい気持さへ起つて來るのである。

改造社の今度の委嘱に、偶然に私の以上の希望を満してくれることとなつた。これ

によつて、「永日」以後「霙月集」に到るまでの諸集から改めて選抜し、またいささかの改訂をして、この一集を作つてみた。八百首を標準であるといふことであつたから、その數に充たすべく、意に滿たぬものも多少は選入した。また改訂しても猶思ふままでないのを、それで置いたものもあらう。眞正の滿足はいつになつても得られないものとつくづく思つた。だが、誤植のままで發表したものを、この機に乘じて直し得たのは、ことに嬉しかつた。もし、私の歌を何かに引用せられる方が、もし可笑しいところがあると思はれたら、この本を參照せられむことを御願ひして置く。

昭和十一年十一月

著　　者

（兩角製本）

昭和十一年十二月一日印刷
昭和十一年十二月五日發行

細風抄

定價 一圓八十錢

著作者 尾上柴舟

發行者 山本三生
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 青野仙吉
東京市芝區田村町四丁目二地

發兌 改造社
振替口座東京八四〇二
電話芝(43)自一一二一番
至一一二四番

三陽堂 青野印刷所印刷